「拉致と決断」を読んで

「拉致と決断」を購読した。著者の蓮池薫氏は、大学３年の時に故郷の海岸でデート中に彼女共々北朝鮮に拉致され、２４年間北朝鮮での生活を強要された。

北朝鮮は拉致はしていないという方針から、庶民からその事実を隠すために庶民との接触を避けるために二重の策で囲まれた招待所地区内で、しかも監視員や思想改造、思想教育のための指導員付き、地区外に出る時は指導員付き添いのみで、緊張の日々の生活。

毎日、日記を書かされ翌朝に指導員が一字、一句をチェックし、思想改造が進んでいないと思われると、自己反省、自己批判、自己総括を要求される緊張の日々。

日本への望郷の念を表情等からも指導員等に感じ取られると、自己批判の対象となることから本音を一切表情等にも表さない術を次第に身につけざるを得ない葛藤の日々。

北朝鮮は労働党の一党独裁国家、社会主義国家を唱いながら首領は世襲制国家であり、首領への自己犠牲をいとわない忠誠心、国家への貢献度が評価基準となり、その評価で主食のみならず副食の配給量もランクづけられ、また、進路、職業、居住地も当局の指示に従わねばならず、当局に反抗して睨まれると、強制労働に追いやられる国家体制。

共に拉致された彼女とは結婚でき子どもが生まれたが、先々子どもたちがこの国でどう生き延びるかだけを優先して考え、日本への帰国の希望を自ら遮断し、子どもたちには自分たちは日本からの帰国朝鮮人と偽り、親子間でも緊張と葛藤を余儀なくされた日々。

当初は日本への帰国は北朝鮮当局の指示は一時帰国であったことから、子どもたちには北部への旅行と偽っての帰国だっただけに、北朝鮮に帰らず日本で子どもたちを待つことにした葛藤と決断、そして子どもたちの安否を案じる１年半の葛藤の日々。

兎にも角にもこの間の精神的葛藤と緊張は、我々の想像のしようのない過酷なものだっただろうだけに、ただただ、この強靭な精神力に、「驚愕、驚嘆」以外の書籍を読んでの感想表現の言葉が見つからない。

自由・民主主義を謳歌し「自由ボケ」、「平和ボケ」が満ちている我が日本の対極に位置する北朝鮮庶民の生活の実情を垣間知ることから、今月半ばの総選挙で、「庶民にとって国家とはどうあるべきか」、「自由とはどういうことか」を思索し、どの政党、どの議員に投票するかの判断の一助に、この書籍をお勧めしたい。

阿部幸泰　　（2012 年 12 月 3 日　記）